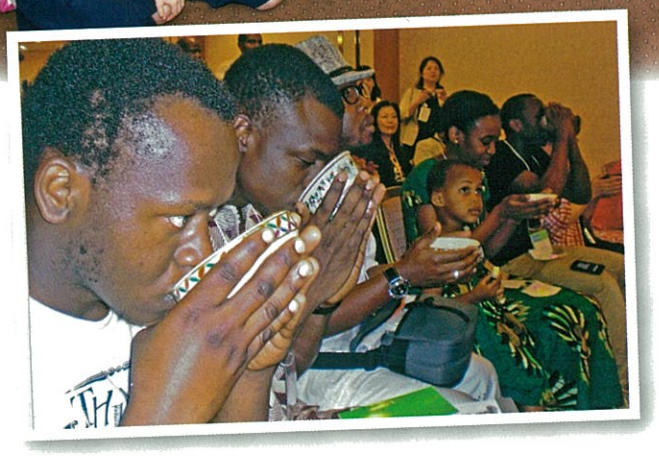
unicef

第20回 アフリカの子どもの日 in Kumamoto



2012年 7月6日～8日

第20回 アフリカの子どもの日 in Kumamoto 実行委員会

パネルディスカッション

必由館高校和太鼓部

分科会の様子

オープニング

アフリカサッカーチーム

ちりめん貝合わせのプレゼント

料理分科会

第20回 アフリカの子どもの日 in Kumamoto

もっと知ろうアフリカ！2012

ごあいさつ

第20回「アフリカの子どもの日」in Kumamoto実行委員会　委員長 谷口 功

ようこそ熊本へ

第20回「アフリカの子どもの日」in Kumamotoにご参加いただきましてありがとうございます。今回は、セネガル共和国特命全権大使のブーナ・セム・ディウフ大使閣下をお迎えして開催できますこと、大変嬉しくまた光栄に存じます。

私たちは毎年、「アフリカをより深く知り、その文化・歴史を学び、また人と人のネットワークを築くことによって、世界の人々が輝く未来に繋げていきたい」という思いで「アフリカの子どもの日」を開催して参りました。おかげさまで今年、熊本県ユニセフ協会は20周年を迎え、また、「アフリカの子どもの日」も20回目を迎えました。いつものように今年も世界の未来を担っていく中高生や大学生の参加を得て準備を進めました。また、日本の各地からアフリカからの総勢70人を超える留学生にも集まっていただいたことを大変誇りに思っています。全ての参加者とともに、世界の人々が互いに助け合い、輝く未来を創りだすために、様々な課題について有意義な意見交換の場になることを期待しています。

結びに、基調講演をいただくブーナ・セム・ディウフ大使閣下に重ねてお礼申し上げますとともに、パネリストの皆様、そしてご参加いただいた全ての皆様、20年の長きにわたって熊本県ユニセフ協会を支えていただいている多くの支援者の皆様に心からお礼申し上げます。県外などから、ご来熊の皆様には、是非、熊本のRGB(=光の三原色、すなわち、火の国の赤、森の都の緑、水の都の青)で表される自然のすばらしさと日本を代表する歴史と伝統文化のまち「くまもと」を楽しんでいただくことをお願いして、実行委員会を代表してのお礼のごあいさつとします。

「アフリカの子どもの日」とは

1976年6月16日、人種隔離政策下の南アフリカ共和国・ソウェトの黒人居住区で、アフリカーンス語強制に反対する学生たちが抗議活動を展開。それに対し、軍隊が無差別に大量虐殺する事件が起こり、南アフリカ最大の悲劇となりました。この日をアフリカの子どもたちに捧げることによって、政府やNGO、国際機関、一般市民、特に世界の子どもが、アフリカ大陸の子どもの生存と発育の機会を活かすことを考えることを期待して、1990年当時のアフリカ統一機構(OAU)加盟の51ケ国が、「子どもの権利および福祉に関するアフリカ憲章」を採択し、1991年より世界各地で「アフリカの子どもの日」の記念行事が開催されています。熊本県ユニセフ協会では1993年設立当初より、連続20年この催しを行なっています。

第20回 アフリカの子どもの日 in Kumam

日 程 表

7.6 Fri

◆熊本県知事表敬訪問

◆セネガル駐日大使とともに考える世界の環境問題
水俣市立水俣病資料館

◆サッカー親善試合（16:00より藤園中学校グラウンドにて）
アフリカ出身の若者と熊本の若者による親善交流試合

開会のことば

7.7 Sat
くまもと県民交流館
パレアホール

10:00 熊本大学訪問　谷口 功 学長　講話
13:30 オープニング（必由館高校和太鼓 熊本ジェンベクラブ）
14:30 基調講演「ミレニアム開発目標とアフリカの未来」
ブーナ・セム・ディウフ特命全権大使（セネガル共和国）
15:10 パネルディスカッション
16:30 終了
18:00 交流会：ホテルキャッスル

交流会の様子

7.8 Sun
くまもと県民交流館
パレアホール

9:00 オープニング
9:10 講師による分科会の紹介
9:40 分科会
①アフリカにおける国づくりーセネガルの場合
②アフリカから学ぶこと
③アフリカ・日本 子どもの命の重さ
④日本におけるアフリカの報道と真実
⑤教育ー学ぶ喜び、知る喜び
⑥持続可能な開発～アフリカで水俣病をふせぐために～
⑦アフリカの音楽を楽しもう
⑧アフリカ料理に挑戦
⑨アフリカ・日本・子どもサミット

分科会発表

12:00 昼食
13:00 各分科会の発表
14:15 みんなで語ろうアフリカ　ルワンダと交信

「アフリカの子どもの日」in Kumamoto 20周年を迎えて

（公財）日本ユニセフ協会　副会長　東郷 良尚

熊本県ユニセフ協会が企画・実施されたアフリカの子どもの日の行事が20周年を迎えられることに感銘を受けると共に、心からの敬意を表します。私自身TICAD（アフリカ開発会議）にも出席し、また、ユニセフの情報を通じ、連日の様にアフリカの子どもの情勢に接しておりますが、20年の長きに亘りこの行事を成功裡に継続されて来られた熊本県ユニセフ協会の皆様のご努力には頭の下がる思いです。

さて、世界の5歳未満児の死亡数は1990年初頭には年間1,400万人でしたが,最近のUN Reportでは年800万人台にまで改善されています。然し乍らこのグローバリゼーションの潮流にとり残されている地域があります。それはアフリカです。アフリカでは死亡率がかえって悪化している地域すら存在します。その原因は地勢学的問題、マラリア、HIV/AIDS、文化的宗教的制約等多々ありますが、やはり最大の問題は自然條件に依存し旱魃に脆弱な食料問題では無いでしょうか。昨年の秋から始まったソマリア旱魃は、サヘルと呼ばれる西部アフリカ8カ国にも及び、この地域で重度の栄養不良から命の危険に晒される子どもの数は100万人に上るとみられています。日本ユニセフ協会では、緊急募金を活発化し、その救援に当たっていますが、どのようにしたらこの状況を共に改善できるのか、ご参加の皆さまの貴重なご意見を聞かせて頂けたら幸せと存じております。20周年、重ねてお慶び申し上げます。

第20回「アフリカの子どもの日」in Kumamotoに寄せて

元ユニセフ東京事務所長　和気 邦夫

今回16年ぶりに熊本を訪れ第20回アフリカ子どもの日の多彩な行事に参加させていただき、お招きくださった熊本県ユニセフ協会の皆様に心からお礼を申し上げます。初めておじゃました時は私がアフリカ勤務を終え東京事務所長として勤務していた頃でした。私はすっかりアフリカ好きになり東京の外交レセプションではアフリカの大使とお会いしていました。それでユニセフ熊本とアフリカ諸国とのつながりを初期の段階で作るお手伝いができたことを喜んでいます。

回を重ねてユニセフ熊本のアフリカ子どもの日のイベントがすっかり大きく育っていたのにびっくりしました。そしてイベントを組織した有能な女性たちや若者が活躍する様子を見て熊本の人々の力を強く感じました。高校生の和太鼓、お茶会、アフリカダンス・ドラムなど楽しませていただきました。また日本国中にいる若いアフリカ人たちを招き熊本が日本のアフリカとの交流の重要な拠点になっているのを感じました。

私が1992年にアフリカ勤務になった時、日本にはアフリカの専門家が少ししかいなかったので本屋に行っても参考になる本があまりなかったのを覚えています。今回熊本では多くのアフリカの専門家たちにお会いできる機会があり、日本もすっかり変わったのを感じました。

子どもの死亡率が高いのはサハラ以南のアフリカと南アジアです。ユニセフのアフリカでの仕事は大切です。みなさまもこれからこの大切な仕事を続けていただきたいと願っています。

熊本大学訪問&谷口 功 熊本大学長講義

2012.7月7日(土)

"Introduction of Kumamoto and Kumamoto University (KU):
=Expanding International Collaboration for the Promising Future="

今年も熊本大学を訪問し、谷口会長の講義をお聞きしました。専門性のある研究や熊本の魅力など多岐にわたる内容に、留学生から多くの質問が出され時間をオーバーするほどでした。ホストファミリーの方も参加され、しばし大学生気分に浸り貴重な体験をしたと満喫されていました。

7月7日はアフリカの留学生が全国各地から集まり、熊本大学を訪問する日でした。当日、私たち実行委員は、工学部百周年記念館の前に立ち、留学生を今か今かと待ち望んでいました。

そこに、続々とホストファミリーに送られて来た留学生の方々。民族衣装や留学生同士の挨拶、かわいい子どもたちの姿を見て、うわーアフリカだなーって感じました。それは、自分たちが今アフリカにいるかのようでした。その後、熊大の谷口学長、セネガル大使のご登場で少し緊張感がでてきました。

まず、学長による講演会では、熊本と熊本大学の特徴を話されました。熊本はRGB、赤(火山、暖かい人々)、緑(自然、木々)、青(水)である。さすが工学部出身だなと感じました。熊本の最先端の技術を誇る企業の紹介では、留学生の方はみな真剣に聴いていらっしゃいました。曲げることのできる太陽光パネル、熊大マグネシウム合金で作られた名刺入れなど、実物をさわることができ、熊本はここがすごいよ!というのがアフリカの方々に十分に伝わったと思います。

セネガル大使からもコメントがありました。アフリカにも自然の資源はたくさんあります。しかし、アフリカはその資源を有効に使いきれていないのです。日本は資源をもらい、技術を提供し、アフリカは資源を売り、開発する。そのサイクルを学びました。

次に、学内のルポゼというオープンスペースで昼食をとりました。話しかけることに少し緊張しましたが、日本語が上手な留学生が多く、楽しい時間を過ごすことができました。何を研究しているか聞くと、医学系の方が多かったです。机ごとに集合写真を撮ったりして、良い交流の場となりました。

実行委員　藤本 賢志 (熊本大学)

熊本県庁訪問 2012.7月6日(金)

アフリカの子どもの日に全国から参加した留学生が、蒲島熊本県知事を表敬訪問し、なごやかな交流が行われました。

水俣訪問

2012.7月6日(金)

水俣市立水俣病資料館

水俣への訪問は今年で7回目になりました。今年はセネガル大使はじめアフリカからの留学生に加え高校生の参加も2人あり、計23名のツアーでした。初めに市立水俣病資料館で15分のビデオを見た後、坂本直充館長の案内で展示資料を見学。次に隣接した国立水俣病情報センターへ移動、世界の水銀汚染の状況を示すマップなどを留学生たちは真剣に見入っていました。その後、体内のメチル水銀濃度を知る目安になる「毛髪検査」を受け、自分たちの水銀値についても体験することができました。そして、最後に市民の努力で美しいものとなった水俣湾を望むエコパークを訪れ、水俣を後にしました。

資料館の玄関には6月に亡くなられた原田正純医師のメモリアルが設置されており、同医師の水俣病での功績についての館長の話に参加者全員で耳を傾けました。

水俣湾を望むエコパーク

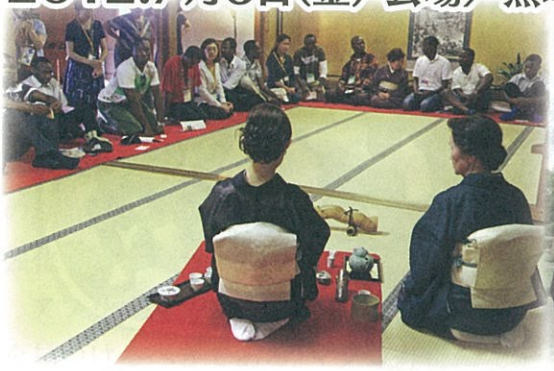
水俣ツアーに参加して　第一高校 1年　西 梓里

私はアフリカの子どもの日の初日にあたる水俣研修へ参加させていただきました。

私は小学生の時、公害学習の一環として資料館には一度訪問したことがありますが、改めてまた参加することができ、よかったと感じています。また、移動中のバスでは、留学生の方とも交流することができ、とても楽しいひと時を過ごすことができました。また、来年も参加させていただけたら嬉しいな、と思っています。

熊本城見学

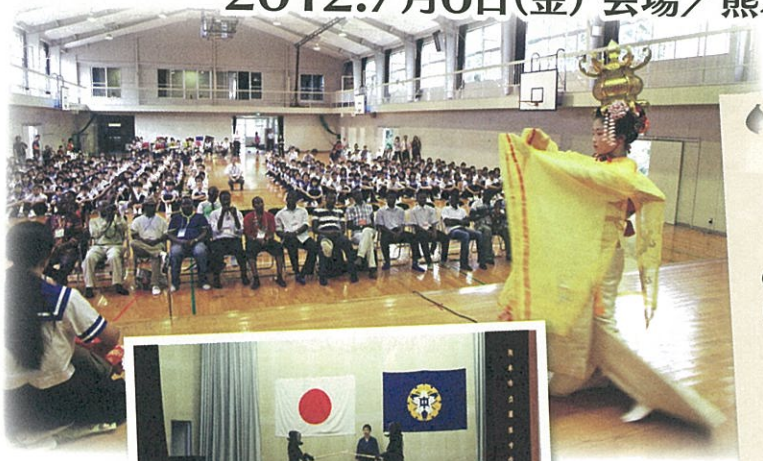
2012.7月6日(金) 会場／熊本城数寄屋丸


東阿部流による煎茶のおもてなし

藤園中学校歓迎会とサッカー親善試合

～アフリカ出身の若者と熊本の若者による親善交流試合～

2012.7月6日(金) 会場／熊本市立藤園中学校



熊本市立藤園中学校3年
生徒会長　森夙 智生

僕たち生徒会は「アフリカの子どもの日」の為、2週間昼休みや放課後練習してきた。国旗の作成や日本舞踊の練習など各自割り当てられた役割をきちんと果たせたのでよかった。中でも、自分の担当したお礼の言葉はとても苦労した。日本語と英語を考えて作らないといけないので、日本語では表せるような小さな事でも英語に直すと、とても難しい英文になったりして難しかった。また体育館でのリハーサルや、他の発表担当と一緒に行うのも大変だった。でも実際当日では、台本通りに進める事が出来たし、無事にお礼の挨拶もできてよかった。また機会があったら、是非もう一度やってみたいと思った。このような他国と交流が出来るというのは、とても平和だからだと思いました。

熊本市立藤園中学校3年
サッカー部キャプテン　福岡 拓実

アフリカの方々との親善試合直前まで僕は、とても緊張していました。とても強そうでした。僕は手足が震えている状態で試合をしていました。でも、周りのみんなの顔を見ると、幼児のような笑顔で試合を楽しんでました。お陰で僕の緊張もほぐれ試合を楽しむことが出来ました。このアフリカ戦は思い出に残る一戦となりました。試合後、アフリカの方々と握手を交わし写真を撮りました。がっちりしたおおきな手はとても温かく優しい手でした。他のみんなも話したり写真を撮ったり、アフリカの方々とふれ合い、良い経験が出来たのでよかったと思います。

基調講演 ミレニアム開発目標とアフリカの未来

ブーナ・セム・ディウフ駐日セネガル共和国特命全権大使

60年代初め、多くの国々が独立した時、アフリカは、巨大で、変化に富んだ可能性を秘めていたことから、約束した大陸と先見された。そのような楽観的視点は、植民地時代の困難な遺産より生じた動乱の独立後の政局により間もなく失われた。

しかしながら、ここ10年でアフリカは政治的、社会経済的に際立った変化を遂げた。2002年～08年には、東アジアに次いで第2位、アフリカ全体では5.6％の強靭な成長率を見せ、今日アフリカは希望とチャンスの大陸として見なされるようになっている。間違いなくそのような経済成果により、MDGに関するアフリカの功績が比較的高められたのである。根本的に貧困はアフリカの多くの地域で減少し続けている。いくつかの国々においては、政治や社会的不安、エネルギーや食糧危機により悪化した2008年～09年の経済下降のマイナス効果があったが、アフリカの極貧率は36％以下にダウンすると見込まれている。万人の教育に関しては、政治的に強く注目され、意思表示があったお陰で、特に初等教育においては、際立った改善が成し遂げられた。2015年までに完全な就学率に及ぶためアフリカ大陸は順調に事を進めている。2011年の国連のMDGに関する報告書によれば、サハラ以南アフリカは初等学校で、最も良い改善が記録された。幼児死亡率の縮小に関しては、保健医療施設の利用促進、効率の良いモニタリング及び評価システムを増やすことに焦点を絞り、5歳未満児死亡率において20年の間に28%の減少が助長された。

しかし、2015年の最終年までに、それ以降も、いくつかの挑戦に真っ向から取り組む必要がある。初等教育の点では、質の面で、完成に挑み、赤字に取り組む努力をなす必要がある。同様に、識字率の改善は、労働生産性を増強し、就職率を上げるのに重要である。

MDG達成での前進は、低所得層、農民層および脆弱層に施行される公共事業が不当にアクセス、利用されていることに対し挑むことにある。不公正を正し、社会的排除と戦うことは、アフリカでMDG達成のために肝要である。故に、今年のアフリカの子どもの日のテーマに関して、「障がいを持った子供たちの権利：保護、尊重、奨励、開花の義務」に焦点があてられている。政府は、障がい者の権利に関する適切な協定を批准することも含め、障がいを持った子どものために平等な機会を与えることをさらに促進する必要がある。

MDGの成功の一方、目標のいくつかが最終年の2015年までに恐らく達成しないことで広く一致した考えである。すべての当事者たちは、残された二年半で勢いを維持し、ポスト2015年の協議事項について考え始める必要性があるということで一致している。国連システムは、ポスト2015年の開発計画に向け、事務次長補レベルでコーディネーターを任命し、既に行使し始めている。2015年までの期間は、計画実施段階の不均衡の解消や、現場における障害に対処するためにアフリカの参画を強化することに焦点を置くことができるであろう。

アフリカは、成長の見通し、ODA縮小の結果に関して、外的ショックの影響をさらに緩和する手段を見つけるべきである。マクロ経済の安定及び包括的な成長が達成されることも同様に肝要である。

この点で、「経済成長を後押しすること」も得
る。それは来るTICAD Vの大黒柱として維持
いるTICAD ＩVの支柱の1つである。それは
ＩVの支柱の1つであり、来るTICAD Vの大
らに民主主義と安定、地域統合とアフリカ内
易、農業開発、青年雇用が強化されること、気
への取り組みは言うまでもない。

最後に述べるが軽んずべきでないことは、
社会経済の変容を加速し、持続可能な開発と
達成するためには、アフリカ諸国は日本の幅
験、専門知識を含む科学技術のノウハウを利
必要がある。日本は既にＭＤＧ達成で大切な
果たしている。特に保健及び教育の分野で、
から5年にわたりアフリカを含む開発途上国
のUSドルの支援を行なっている（保健50億US
育35億USD）。

コーディネーター
澤 良世氏

第20回「アフリカの子どもの日」in Kumamotoに寄

「アフリカの子どもの日」in Kumamotoでは、毎年、アフリカの大使に基
演をお願いしている。大使の人選は、前年参加された大使が引き受けて
る。最近だけでも、ザンビア（2007年）、ルワンダ（2008年）、ジブチ（2009
ウガンダ（2010年）、モザンビーク（2011年）と続き、今年は、セネガル共和
ブーナ・セム・ディウフ全権特命大使が参加してくださった。打ち合わせの
にセネガル大使館に伺うと、「モザンビークのマラテ大使から、熊本のこと
フリカの子どもの日』のことも聞いています。20回という記念すべき年に参加できることは光栄で
言っていただいた。

東京で開かれるアフリカ関係の会合では、休憩時間に「アフリカの子どもの日」in Kumamoto
い出話をする大使の輪ができる。どの大使も「熊本では多くのことを学んだ」「とても貴重な経験
た」と言われる。ディウフ大使からは、早速、「来年、参加していただく大使を紹介しましょう」とい
出があった、と聞いている。

「アフリカの子どもの日」は、映画会や写真展、講演会など、年間を通じた「アフリカを知り、アフ
ついて考える」ための活動の一環であり、実行委員会のメンバーとして活動する高校生や大学生

パネルディスカッション

パネリスト

徳永 瑞子氏（上智大学教授）

砂野 幸稔氏（熊本県立大学教授）

カンベンガ・マリールイズ氏（ルワンダの教育を考える会理事長）

ンダマギナ・ジャスティン（熊本大学留学生）

コメンテーター

ベルミロ・ジョゼ・ディウフ特命全権大使（セネガル共和国）

司　会

澤 良世氏（元ユニセフ駐日事務所広報官）

徳永 瑞子氏

中央アフリカ共和国で看護師として20年活動しているが、ほとんどの日本人はどこにその国があるか知らない。今日は中央アフリカ共和国の代表と思ってHIV／エイズについて現状を話します。エイズ感染者は世界中に3340万人、その65%はサハラ以南の国にあり、中央アフリカ共和国の感染者は6.3%を占める。2005年からARV（抗レトロウイルス薬）が届くようになり死亡率は減少したが、薬が少ない、医師や看護師不足、検査器具もなく地方には届きにくい。必要としている人の10%しか行きわたっていない。1日1.25ドル以下で生活している人が人口の62%を占め貧困に苦しんでいること、そしてエイズが死の病であることを知ってもらいたいと思う。

砂野 幸稔氏

アフリカ諸国にとって教育の普及はもっとも重要な課題の一つです。国連のミレニアム目標でもすべての人が読み書きをできるようになることが目指されています。ただ、重要な問題でありながらあまり注目されていないのが教育言語の問題です。

日本のように一つの言語だけ知っていれば不自由なく暮らせるという国はそれほど多くありません。とくにアフリカでは一つの国で数十から数百の言語が話されていることが多く、ほとんどの場合、かつての植民地支配者の言語である英語やフランス語が教育言語となっています。

成績優秀で上級学校に進学することのできる一部のこどもたちは、英語やフランス語を完璧に使いこなすようになりますが、多くの子どもたちにとっては、まったくの外国語である英語やフランス語での教育は大変な負担であり、ドロップアウトの原因となるだけでなく、中途半端な英語やフランス語の知識だけでは、社会生活に最低限必要な知識や情報を得ることも困難です。

ユネスコなどでは子どもの母語による初等教育を推奨していますが、数十から数百という言語がある状況ではそれはほとんど不可能です。ただ、多くの場合、アフリカのの子どもたちは早くから自分の母語のほかに地域共通語など複数の言語を話すようになっているので、そうした地域共通語などによる初等教育が行われることが望ましいのですが、タンザニアなどごく一部の国を除けば、まだ実現には時間がかかりそうです。

カンベンガ・マリールイズ氏

アフリカでは女性が政治、教育から遠ざかっていた時代が長く続いた。ルワンダでは18年前の内戦後、国民による憲法ができて女性の国政参加を高めようと35%以上は女性議員にするということが決定され、今では53%に達した。これは世界一です。

見えてきたのは、子どもを育てている母親が教育を受けていれば自分の子どもにも教育を受けさせたいと思う。その「おかあさんの心」を世界に広めていきたい。女性が国会の中で働くようになったので子どもの未来は暗くないと思うようになった。

ンダマギナ・ジャスティン氏

ルワンダの教育について

日本で、アフリカの人のイメージとは身体能力が優れていて、有名なサッカー選手や陸上選手を目指している人々だと思われています。実際、アフリカの子供達に『何になりたい』と尋ねると、ほとんどの子供は違う答えを出すと思います。医者になりたい子供が多いです。子供のころの友達もみな、医者になりたいと思っていました。しかし、様々な問題で教育を受けられる人数が少なくなるため、たくさんの子供達の夢が消えていきます。その問題としては、『授業料の納入が困難である』、『自宅から学校までの距離が長い』、『親は学校の重要性が分からない』などがあります。このような問題を乗り越えるために、母国のルワンダは無償初等・中等教育システム（小学校6年間＋中学校3年間）を導入しました。2005年度の子供の登校率は86.6%だったのに対し、無償教育システムを実施することで、2010年度の初等学校における登校率は91.7%まで上がりました。さらに、高等学校に行ける子供の数を増やすため、2012年2月、無償高等が始まりました。以上の状況から見ると、ルワンダはミレニアム開発目標のターゲット2-A（2015年までに、世界中のすべての子どもが男女の区別なく初等教育の全課程を修了できるようにする）を達成することが出来るのではないかと思います。最後になりますが、これからはルワンダにとっては専門学校がとても必要になってくると思います。良い専門学校の教育によって、雇用の問題を解決することができると考えられます。

ルワンダとの交信

ルワンダ共和国ウムチョムイーザ小学校の生徒たちとスカイプによる交信を行いました。第一声が聞こえた時には会場から大きな拍手とともに大歓声があがりました。ウムチョムイーザ小学校はカンベンガ・マリールイズ氏代表の「ルワンダの教育を考える会」が、故郷キガリ市に設立した小学校です。NTT西日本熊本支店のご協力によりこの交信を行うことができました。

アフリカ・熊本の若者たちの輝き

アフリカの子どもの日ふれあいスナップ

第20回「アフリカの子どもの日」in Kumamotoでは、さまざまな内容のプログラムが実施されました。熊本の若者たちの中には初めてアフリカの人と接した人もいたことでしょう。アフリカの人どうしも熊本で友情を育みました。広い地球上の、この熊本で出会えたことに感謝しつつ、ふれあいの輪が広がりました。お互いの国の違いや共通のことを理解し、後世に残す守るべき環境についても考える機会になりました。おりおりのスナップで3日間をたどってみました。

1日目 水俣訪問

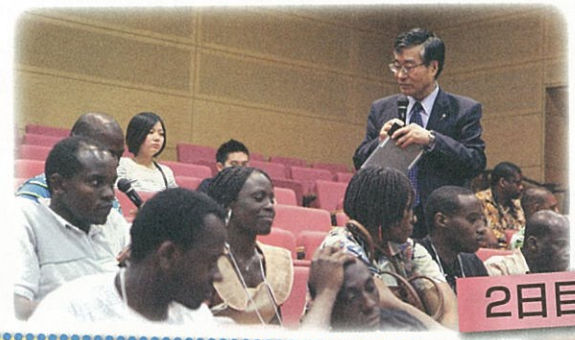
1日目 伝統工芸館

1日目 熊本城見学

2日目 オープニング

アフリカ・熊本の若者たちの輝き

アフリカの子どもの日ふれあいスナップ



2日目 熊本大学訪問

アフリカ・日本・子どもの命の重さ

講師の先生方

アフリカの音楽を楽しもう

各分科会報告

教育-学ぶ喜び、知る喜び

アフリカにおける国づくり-セネガルの場合

日本におけるアフリカの報道の真実

アフリカ・熊本の若者たちの輝き

アフリカの子どもの日ふれあいスナップ

各分科会報告

持続可能な開発

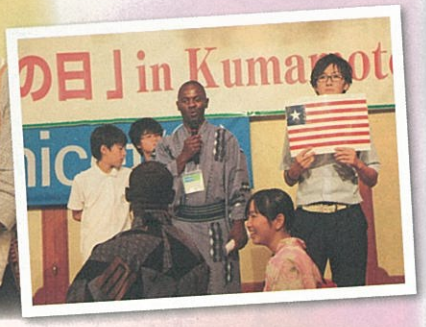
ランチタイム

未来を担う子どもたち

交流会

日時：7月7日（土）18：00～
場所：ホテルキャッスル

茶席を設けた会場の一角では、高校生のお点前が参加者を迎えました。谷口功会長の歓迎の言葉に始まり、セネガル大使のご挨拶、乾杯へと続きました。日本各地から参加してくれたアフリカ出身の皆さん、講師の先生方、ホストファミリーの皆さん、いつもユニセフを応援していただいている方々、そして、この日を楽しみにしていた熊本の若者など370人が集いました。開宴当初から熱気にあふれた会場では、アフリカと日本の料理を楽しみながら草の根交流に花を咲かせました。



第20回
「アフリカの子どもの日」in K
子どもの日」in Kumam
「アフリカの子どもの日」in
リカの子どもの日」in Kun

分科会 アフリカにおける国づくり－セネガルの場合

講師：ブーナ・セム・ジュフ特命全権大使(セネガル共和国)

私たちはアフリカ子どもの日への参加は初めてでした。当初の、分科会に出席するまでのセネガルに対するイメージは、多くの他のアフリカ諸国と同様にひどい貧困や絶え間ない民族間紛争が今なお存在するというものでした。しかし、実際は、国内における宗教が原因の対立はほとんど存在せず、セネガル国民はそれぞれ多様性を持ちながらも全体での一体感すら持っています。その一体感が現在の素晴らしいセネガルに導いてきたのだなあと、大使が堂々と語られる様子を見て、強く感じました。同時に、今の日本人には一体感というものが欠如しているようにも思いました。もちろん自分たちも含めてです。日本のさらなる発展のためには、まず、ひとりひとりが日本の一員という意識をもって、国内外のことに目を向けることが必要だと感じられました。今回の参加を機会に、自分の考えの幅が広がり、成長できたことを嬉しく思います。参加して本当に良かったです。

実行委員　本田 幸実、松田 由衣（真和高校）

セネガルの特命全権大使の基調講演では、アフリカの開発が2000年に制定された、8つの目標をそれぞれ達成度を数字で示し2015年までに達成するという「ミレニアム開発目標（MDGs）」を基に行われていることが説明された。

ここでは国連レベルでのアフリカの支援が、どのような計画、目標のもとで行われているのか、また現在の進捗状況、問題点、今後の課題などの話しがあり、事実上の現状報告を生で聞く機会となった。

まだまだアフリカは多くの不平等を抱え、教育、子供の死亡率、就学のドロップアウト、頭脳流出、農村と都市の格差など取り残された問題も多くあること、一方で成長は目覚しく平均6%もの高成長を維持していること等アフリカの力強さも見えてきた。

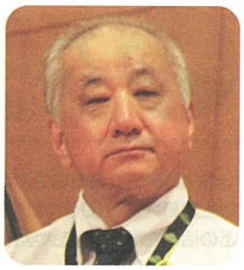
「ミレニアム開発目標」には貧困撲滅、教育達成に続き、ジェンダー平等が3番目に掲げられているが、ジェンダー平等がいかに人間の社会や平和の安定に大きく関わるか、内戦で苦しんだルワンダのマリールイズさんからも報告された。

分科会では現在のアフリカ諸国の成り立ちの歴史や紛争の原因として植民地支配の名残が大きく影響していることの話しがあり、共通の歴史からくる問題が明らかになった。その中でジンバブエ、シエラレオネ等の参加者からアフリカでの民主主義のモデル国であるセネガルの大使に、どうしたら安定した平和が築けるのか、ナショナリズムに走らないバランス感覚を持てるのか等の切実な質問が投げられ内容の濃い充実した分科会となった。

実行委員　深谷 智佳子（一般）

分科会 アフリカから学ぶこと

講師：和崎 春日氏（中部大学教授）



1949年生まれ。30年前からおよそ20回のアフリカ行きを重ねて、アフリカ大陸に通算6年半在住し、タンザニアやカメルーンの村を中心に、牧畜民、農耕民、都市住民とともに生活。カメルーンのバムン語に精通し、バムン王国より王子のタイトルを授与される。2009年度まで名古屋大学大学院教授、現在は中部大学国際関係学部長。前日本アフリカ学会副会長、現理事。

私たちの分科会では実行委員会設立の時、「今年は最初に日本の文化を紹介しよう。」ということを主に実行委員会を進めてきました。慶誠高校の生徒さんが、まず生活の文化で一番大事な「食」ということから日本の紹介を始めました。食事の仕方、礼儀作法などの説明から、いろんな分野に発展し、日本とアフリカの日常の食のスタイル、家族構成、それから絆というところまでいろんな意見が出ました。日本の深刻な少子化に比べアフリカの大家族の生活のすごさなどに特に熱が入り活発な意見が出て、日本人が失ってきたものを新たに思い起こさせてくれた分科会となりました。

私たちの分科会では、日本を通してアフリカの事を知りました。まず日本の家族について紹介をしました。

日本も以前は、アフリカにように大家族が多かったのですが、今では核家族が多いです。この話から、人口問題の話に発展しました。アフリカの人口が増えていくのに対し、アジアの人口は減少しています。日本では経済や子育ての問題があり、子どもを作らない人や結婚しない人も増えています。しかし、アフリカでは日本に比べて経済や生活状態は決して良くありませんが、結婚をし子どもをたくさん作り育てています。その理由は、日本と違って互いに助け合う環境や関係があるからこそできることだと思います。

アフリカはこれから経済が発展していくことと思いますが、いつまでもこの関係をなくさないで欲しいと思います。

実行委員　清水 彩（慶誠高校）

第20回
アフリカの子どもの日
in Kumamoto

分科会 アフリカ・日本 子どもの命の重

講師：徳永 瑞子氏（上智大学教授・アフリカ友の会代表）

NGO「アフリカ友の会」代表。1970年九州大学付属助産婦学校を卒業、1976年にベルギーのレオポルド王記念熱帯医学校卒業、1993年に
衛生院研究課程（Doctor of Public Health）を終了。国内の病院勤務、ザイールでの国際協力活動を経て、中央アフリカ共和国におけるエイス
どの活動を開始。長崎大学、聖母大学を経て、現在は上智大学教授。フローレンス・ナイチンゲール記章、読売国際医療功労賞など受賞多数。

講師より アフリカ・日本の子どもが幸せであるために

私は助産師として小さな命を見つめてきた。元気な産声をあげた瞬間から、いやそ
親の胎内にいる時から命の重さに格差がある。母親が病気で体内環境が悪く未熟
生まれてくる子ども、胎内で病気に感染して生まれてくる子どももいる。

また、途上国では健康に生まれてきても栄養失調に陥ったり、抗生物質がないた
症で亡くなる例も多い。では、経済的に豊かな日本で育つ子どもたちは幸せであると
ろうか。ニュースで報じられる虐待、いじめ、子どもの自殺などはもっと悲惨で残酷で

いつの時代も子どもは犠牲者である。子どもは一人では生きてゆけないので養育
ど）が必要である。子どもの命は、養育者が誰であるかに左右されているといっても過言ではない。途上国
養失調・下痢・マラリアなどで多くの子どもが亡くなっている現状をすべて貧困で語られる。貧困は、その要
うるが、養育者が病気に対する正しい知識を持っていれば子どもの命を守ることは可能である。賢い養育
もを栄養失調にすることも、虐待することもない筈だ。アフリカも日本も子どもの命を守り、子どもが幸せに
るように養育者の教育や社会的・経済的サポートを強化するべきだと考える。

アフリカが抱える問題、HIV/AIDSや栄養失調、予防接種、子どもの教育などの貴重なお話を聞き
防接種には厚い壁があり、電気のない所では冷暗保存ができないことや、交通手段の不足、医療者の
りました。また、穀物の分配の不均衡によって十分な穀物が行き渡らず、栄養失調で命を落としてい
たちがいることも知りました。一方、先進国やアフリカの都市部では生活習慣病で命を落とす人々
食べることが一番重要で、薬があったとしても食べなければ病気になってしまいます。これらの問題
るために、穀物の分配を正しくマネージメントする必要があるということを学びました。栄養失調に
顔を失った子どもたちに、笑顔を取り戻せるようにしなければならないと思います。難民キャンプを
留学生は、あきらめない、生きている限り希望があると言われたことが印象的でした。

実行委員　内野 亜寿華（専修大学

分科会 日本におけるアフリカの報道と真実

講師：大津 司郎氏（フリージャーナリスト）

フリージャーナリスト。1975年青年海外協力隊員として3年間タンザニアで農業指導。92年以降ルワンダ、コンゴ、スーダン、アンゴラなどの紛争地域での取材を続ける。日本人としてはじめて1992年に南部スーダン・ゲリラ基地に、1995年にはルワンダ・ギタラマ刑務所に単独潜入。最近、ソマリアとコンゴ民主共和国東部を取材。テレビのドキュメンタリー番組ではアフリカの自然コーディネーターとして活躍。近著に『アフリカン ブラッド レアメタル―94年ルワンダ虐殺から現在へと続く「虐殺の道」』（無双舎、2010）

講師より 数年前の、ビデオ映像を見た後のアフリカ人参加者たちによる感情的ネガティブ、ポジティブ的意見交換から、少しずつ分科会の雰囲気は変わっているような気もする。参加者の資質によるものか、今回はルワンダ虐殺関連のビデオを流さずコンゴにおけるJICAのプロジェクトのビデオを流したからかもしれない。参加者の中にはセネガル大使館参事官の方のようにかなりアフリカ政治に関心を持っている方が多かったのも単なるネガティブ、ポジティブ論争にならなかった一因かもしれない。あるアフリカの方が〝知らない〟ことは〝無関心〟の大きな原因だと言った言葉が印象的だった。やはり日本メディアの対アフリカ報道姿勢は大いに問題があると思う。それはネガティブ、ポジティブ以前にやらない（放送しない）、知らない、関心が無い、ということだ。そういった意味でこの国はいつまでたっても〝世界〟の仲間入りができない〝孤島〟といっていい。熊本のイベントにもし大きな意味があるとしたら、そうした孤島を世界に変える力を九州の一角から発信することである。

日本ではアフリカの報道が少なくアフリカについて知る機会がありません。その背景にはアフリカの現状をテレビ局が受け入れないという問題があります。またアフリカを否定的なイメージで子どもたちに伝える教育をしています。アフリカの経済は成長しつつあり、様々な困難を乗り越えてきたアフリカは世界の最前線です。アフリカと日本はお互いの理解を深めることが大事で、メディアだけではなく自分たちにも責任があるということです。ひとりひとりがアフリカへの無関心をやめて日本人が外を見て、まず身近な国から関心を持ちアフリカの現状をインターネットで動画配信をすることも一つの手段かもしれません。それぞれに責任があるといった意識を持って考えていくことが大切だということを学びました。

実行委員 清原 秀美（熊本信愛女学院）

今回も「アフリカ報道から見えてくる日本」の姿を映像でみて、中国がアフリカで力を強めていて、それに比べ日本は関心を持っていないなと感じた。一番納得したことは「アフリカは世界の最先端」ということです。いろいろな困難を乗り越えてきた国にしかわからないことも多いし、ぜひ学べるところは学んでずっとアフリカに興味、関心を持っていたいと思った。

実行委員 野呂 一葉（熊本県立大学）

分科会 教育 ―学ぶ喜び、知る喜び

講師：カンベンガ・マリールイズ氏（ルワンダの教育を考える会理事長）

1965年に父の赴任先のザイール（現コンゴ民主共和国）で生まれる。1986年にルワンダの首都キガリの専門学校に洋裁教師として赴任。199
ら1994年3月まで、青年海外協力隊現地協力員として福島文化学園で洋裁の研修を受ける。1994年4月にルワンダで内戦が勃発し、隣国ザイー
12月に研修生時代の友人らの尽力で家族そろって再来日。1995年4月から、桜の聖母短期大学家政科で聴講生として学ぶ。2000年に「ルワン
考える会」を創設し、2010年6月に同会理事長に就任。

講師より

「アフリカの子どもの日」in Kumamoto 20周年おめでとうございます。

皆様の努力によって20年間という長い年月の活動を続けることができました。“本当に継続は力になる”沢山の人はユニセフ熊本の活動のおかげで世界と繋がったに違いありません。アフリカの留学生人生において一生忘れられない思い出になったと思います。今回特に感じたことは熊本の高校生が積極的に参加していたことです。世界の未来である若者のためにユニセフの活動はとても大切です。皆様の努力は間違いなく実を結びます。準備は大変にも関わらず本当に力を合わせている皆様の前向きな意志にいつも感動します。参加させていただいて私は本当に幸せです。これからもステキな活動が続けられますように心からお祈りしています。

たくさんの幸せありがとうございました。皆様健康に気をつけて、末永く活動を続けてください。いつもアフ
供たちのことを心に留めて活動してくれてありがとうございます。又来年楽しみにしています。

20周年おめでとうございます。

講師のマリールイズさんは今回で7回目の参加。県内での講演会
もあり、分科会も定員を上回る参加がありました。まず、現在の世
目を向けることの大切さ、実体験が物語る教育、学ぶことの重要
れました。次に、教育の有無が人生に及ぼす影響について3グル
かれての参加者全員での話し合いの場になりました。最後に、マリ
さんから教育を受けることは日常生活に繋がっている。困難の中
プロセスを味わいながら目的を達成する喜びがあることを話され

参加者からの発言も活発で、教育の原点である「学ぶことが
る」ことを考える貴重な分科会になりました。また、彼女が運営す
ワンダの学園の映像もあり、元気に遊び、学ぶ子どもたちの様子
いものがありました。

分科会 持続可能な開発～アフリカで水俣病をふせぐために～

講師：井芹 道一氏（熊本日日新聞社・文化生活部長兼論説委員）

新聞記者。1954年生まれ。慶応大学卒。カリフォルニア大学バークレー校留学後、1980年に熊本日日新聞社（熊日）入社。政経部記者、東京支社編集部長、論説委員を経て、2007年に熊本大学教授として出向、法学部で「水俣病と世界の水銀問題」を担当。熊日に復職後、政経部長兼論説委員など。2001年から欧米、アジアの水銀国際会議に参加し、科学者らを取材している。著書に「Minamataに学ぶ海外 水銀削減」（成文堂、2008）。現在、文化生活部長兼論説委員。

講師より 原発対応では現実的対応が大勢

水銀、カドミウム…放射能と日本の経済発展は多くの犠牲を払ってきた。国連が2020年めどに目指す「健康と環境に優しい持続可能な開発」とは程遠い現状です。分科会では水俣病と水銀問題に加え、原発対応を論議しました。

日本の高校生は「生活への影響が大きく、再生可能エネルギーでは不十分」（熊高、第一）とし、原発の即時廃止より段階的廃止を支持。アフリカの大学生からも日本側と同趣旨の意見が続き、原発に寛容だったのは意外でした。ただ、政策研究大の学生ら2人から「福島後の日本の行動は世界に影響する。ドイツに倣い日本は原発廃止を」（ケニア）との少数意見があり、議論は広がりました。

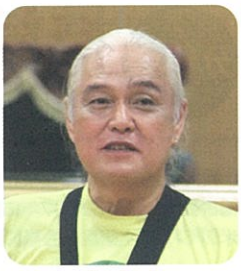
一方、「先進国は発展しているから、原発は危険だと言えるのでは」（ジンバブエ）と持続可能な開発に問題提起する意見も。これには「近道を行って失敗したら、逆にそれにかけた時間が無駄になる。持続可能な発展は可能だ」（ウガンダ）との反論もありました。印象的だったのは「先進国による押しつけではなく、先進国の教訓に学び、私たちアフリカ自身が解決策を見出していく姿勢こそ重要」（ケニア）という長崎大生の発言です。多様な意見が出ましたが、共通していたのは、原発の永続を望んでいた人はいない、ということです。

水俣病。熊本で暮らしているにもかかわらず、私は深く学んだり考えたりしたことがなかった。水俣病の教訓から学び考え続けていくことが、私たちにできることなのだと今回の分科会を通して感じた。そしてそうすることで、水俣病は消えてなくならないのだと思う。そのためには、まず自分が水俣病について知り、学ばねばならないと思う。だから、これからも少しずつ水俣病や世界の環境について学んでいきたいと思う。「持続可能な開発」というのは難しいテーマではあったけれど、今回、水俣を訪れ、そして井芹さんの講話を聞き、アフリカの留学生と意見交換をし、水俣病・世界の環境・福島の原発について深く学べたことはとても貴重な時間だった。

実行委員 持田 香織（熊本高校）

分科会 アフリカの音楽を楽しもう

講師：村本 大氏（熊本ジェンベクラブ代表）



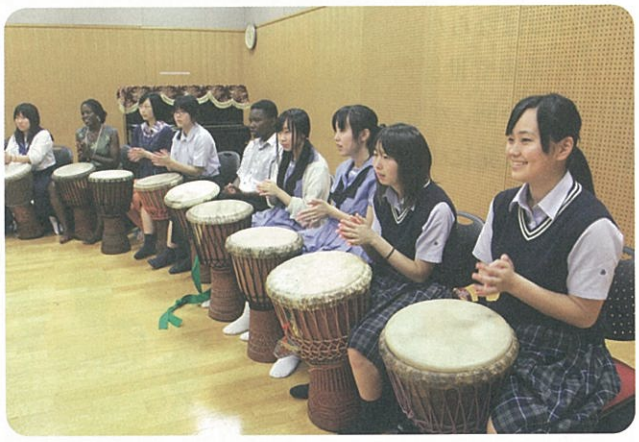
熊本ジェンベクラブ代表。1995年に熊本ジェンベクラブを結成、アフリカンパーカッションの演奏と公演企画を行う。第54回くまもと未来国体では、開会式アトラクションとして熊本ジェンベクラブのメンバー100人がジェンベを演奏。現在、イベント・ワークショップなどを中心に各地で活動している。

私は音楽の分科会に参加しました。ジェンベを大人数で演奏できる機会はめったにないので、とても楽しかったです。ジェンベの叩き方だけで三通りの音が出るなんて、知りませんでした。叩いていたら手が真っ赤になりましたが、そのたびに上手くなっている感じがして嬉しかったです。

ジェンベの演奏の際に歌った「ククー」という歌は、アフリカののどかで力強い印象が感じられました。ダンスも、ユニークな動きの一つ一つに意味が感じ取れて見ごたえがありました。

大学生の方や違う学校の高校生たち、イベントに参加してくださったアフリカからの留学生の方々。初対面の私達がひとつの曲を演奏しきったときは気分爽快で、心地のよい達成感が今も胸に残っています。まさに、全身でアフリカの音楽を楽しんだ一時でした。この分科会に参加して、本当に良かったです！

実行委員　犬童 あいこ（真和高校）



分科会 アフリカ料理に挑戦

講師：戸次 元子氏（管理栄養士）

管理栄養士。1966年熊本女子大学（現熊本県立大学）家政学部卒業、1973年から2007年まで熊本商科大学（現熊本学園大学）に勤務。県内の多くの地域や団体で栄養および調理指導にあたるほか、ラジオ番組や情報誌でアイディア料理の紹介など多岐にわたり活動。熊本城築城400年記念事業「熊本藩士のレシピ帖」調理。熊本学園大学関連会社㈲グリーンキャンパス取締役。

講師より　今年度の分科会は、昨年と違ってアフリカと熊本の学生さんとの交流ができて、有意義な分科会となりました。昨年は、参加者300名程の昼食を作ることが精一杯で、交流をする余裕がありませんでした。今年はケニアとウガンダの男性2人と熊本の女子高生が料理を一緒に作ることで、アフリカ料理や食材等について質問ができて知識を深められたことが良かったと思います。挑戦した料理は、セネガルのマッフェというオクラの入ったとろみのあるスープ、ジンバブエのバナナ入りの野菜とフルーツのサラダ、ウガリ（今回はトウモロコシ粉を使用）の3種類を皆で協力して作りました。上手に美味しく出来上がり、楽しく試食をさせて頂き、マッフェは参加者全員にも披露することができました。

日本の国土の80倍もあるアフリカ大陸ですから、地域によってたくさんの郷土料理があると思います。国民の健康の為に国策として栄養については充分に考えられていると思いますが、食糧事情によって子ども達への影響も大きいはずです。また、日本での原発利用の問題についても同じことです。私達は「食の大切さ」を通して、改善したり協力できる事を考えながら、世界の平和に向かって活動していきたいと思います。最後に関係者の方々の御協力に厚く感謝致します。

私達の分科会では、アフリカの料理のマッフェ、ウガリ、サラダに挑戦しました。オクラをペースト状にしたものやピーナッツバターを使ったマッフェはどんな味になるのか、とても不思議でしたがとても美味しかったです。ウガリはアフリカの留学生2人に作ってもらいました。混ぜるのに力が必要で、これを毎日作っているというのはすごいな、と感じました。交流会では、アフリカの朝食の定着や食事の時の飲み物等、たくさんの質問に答えて頂きました。留学生とだけでなく、学生同士も料理の時は楽しそうに交流していて、とても良い分科会になったと思います。　　実行委員　佐藤　圭（真和高校）

分科会 アフリカ・日本・子どもサミット

講師：慶田 勝彦氏（熊本大学教授）

熊本大学文学部教授。文化人類学と東アフリカ研究が専門。1986年よりケニア海岸州のミジケンダ社会の研究を行い、政治、宗教、医療に関する諸論文を発表。現在、2008年にユネスコ世界遺産の文化遺産に登録された「ミジケンダの聖なるカヤの森林群」を研究している。2009年5月から2010年10月まで英国オックスフォード大学の社会文化人類学研究所(ISCA)に客員研究者として所属。

講師より 私たちの分科会のテーマは「Peace/平和」であった。高校生たちはモザンビークから始ま
う、銃を捨て、その銃で「tree of life／命（いのち）の木」を作るという芸術的実践に触発され、ペットボトル
の木」を手作りした。そして、日本とアフリカからの参加者全員に平和のメッセージを紙で作った「葉っぱ」に
でもらい、木を平和の「葉っぱ」でいっぱいにした。また、平和の木の下では高校生による書道の実演が披露
加したアフリカの子どもたちも平和や平和を連想する文字を綴った。どれも個性的で、思わず微笑まずには
いものばかりだった。この他、あやとりや折り紙、三目並べなどもみんなで楽しんだ。アフリカと日本の子どもた
の生活についての話にも花が咲き、木の下でとりとめもないおしゃべりをするという、アフリカの子どもの日に
い1日を過した。木に貼付けてあった「挑戦」という力強い墨の文字が心に残っている。平和とは自然に与えら
ではなく、ひとりひとりが平和への挑戦を継続することの重要性を教えてくれていたからだ。参加者全員で
た「平和の木」、それはささやかではあるが、確か
実践になっていたことを報告しておきたい。

この分科会では、ピースツリー、あやとり、習字、三
折り紙をして交流を深めました。その中で、私はピー
作製とあやとりを担当しました。ピースツリーとは、平
として、モザンビークの武器の木からイメージして作
私たちは、短冊に平和の願いを書いてその木につる
アフリカの子どもと、日本の子どもたちは皆同じ願い
おり、とても心が一つになったと感じられました。

アフリカでは今でも子どもたちのまわりにたくさん
武器が残っています。少しでも「死の道具」を「生き
に変えることができたらいいと思っています。そのた
今回の交流を通してもっと日本の人にもアフリカのこ
てもらい、平和実現のために考え、それを行動に移
ばいけないと考えました。

交流する中で、たくさんの笑顔が見られて本
かったです。貴重な経験をありがとうございました

実行委員 橋本 季代子（熊本信愛

感想、メッセージ

【メッセージ】 Bruno Fokas Sunguya（タンザニア）東京大学

この会を開催してくださった熊本県ユニセフ協会のみなさん、ご来賓の皆さま、生徒の皆さん、この会場に来てくださったすべての皆さまの前でこのようにお話しできることは私にとって大変名誉なことです。

この3日間を通して私たちは貴重でなおかつ楽しいワークショップやイベントなどを体験することができました。それらは私たちにとってとても素晴らしい経験でした。わたしたちとアフリカの人たちとの協力を築き上げていくことが特にこれから大切です。プーナ・セム・ディウフ大使は昨日アフリカの方々にアフリカの若者たちはアフリカの先頭にたっていかなければならないと話されました。アフリカの方々はアフリカに対し、こうなって欲しいと思う良いイメージを描いていかなければなりません。様々な困難がアフリカの地にはありますが、アフリカの皆さんがつちかってきたものは持続していかなければなりません。そしてそれを一緒に強めていかなければなりません。私たちにはそれができます。

国連の開発計画が提唱している道筋にアフリカはいますが、その中で重要なものは4・5・6の開発目標です。まだまだアフリカは困難な道のりを歩いていかなければなりません。わたしたちは今アフリカのために動く時を迎えています。アインシュタインの言葉で「私たちが作り出した問題をその作り出した同じ思考で解決することはできない」という言葉があります。アフリカから来ている皆さん、皆さんが持っている新しい考えやもともと持っているエネルギーを大いに役立ててください。

最後にケネディ大統領の言葉を紹介します。「国があなたに何をしてくれるかではなく、あなたが国のために何ができるか」アフリカのために前へ進んでいきましょう。わたしたちの持っている技量、経験を活かして今できることをしましょう。

【アフリカの子ども日感想】 本田 はつな／筑波大学

初めて参加したのは、中学生の時でした。学校に通うのが好きでない、自分を無力だと感じている子どもだったので、実行委員会に居場所を求めた訳です。久しぶりに、今回は交流会から参加しました。感想としては、短い時間の中で、スゴイことが今起こっている！と何度も思いました。大使の講演の言葉を借りれば、このイベントの「費用対効果」が非常に高いことが私には理解できたのです。顔、ことば、服、音楽、食べ物…すさまじい量の情報の中で、ただ私たちが出会う、それだけがもたらす「何か」があります。事務的なまじめさでなく、誠実さによって事前学習がなされたからこそ、緊張や高揚の中で、それが火花のように瞬く間に強烈にはたらいていたのでしょう。アフリカのこどもの日は、アフリカについての知識や情報のやりとり以上のものを提供し続けています。友人や、自分の興味や能力を発見した人もいたでしょう。私の場合は、まさにその何かを再発見したのです。

■James, Harriet, Khumbo, Chimwemwe and Mapesho Nyirenda（ザンビア）九州大学

今年もアフリカの子どもの日に参加するチャンスをくださってどうもありがとうございました。イベントは面白かったですし、同時に教育的でもありました。

そう、セネガルの大使が示唆されたように、アフリカを訪れたいと思っている親愛なる日本の皆さんが、もっとアフリカに関する理解及び知識を深めることが出来るように、それぞれの参加国のポスター・セッションを行うことを提案します。正直に言って、アフリカの知識について私が尋ねると、依然としてアフリカは森に覆われた大陸で、私達が未開発の森林地帯で動物と一緒に暮らしていると思っている人たちがいます。私は妻と数ヶ月前に添付のパワーポイントデータを作成し、プレゼンしました。どうぞ素敵な一日をお過ごしください。重ねてご招待頂き、そして心の温かい映子さんをホストにしてくださってありがとうございました。どうぞ彼女によろしくお伝えください。そして、皆さんがパワーポイントを楽しんで見てくださいますように。

■Ana Sofia dos Santos Guerreiro（ポルトガル、熊本）英語講師
■Michael Frederick Hofmeyr（南アフリカ共和国）熊本ALT講師

アナと私を「アフリカの子どもの日」のイベントに招待してくれてありがとうございました。パネルディスカッションは大変興味深かったですし、土曜日の夜のパーティーはとても楽しかったです！今後のための提案として、パネルディスカッションは、もっと聴衆が参加した方が有益でしょう。コメンテーターが各パネリストのプレゼンにコメントする代わりに、聴衆のメンバーが質問をする時間をとった方がもっと興味深いと思います。そうすれば、様々な、幅広い見方を得ることができると思います。皆さんお体を大切に。今後のイベントでも頑張ってください。

感想、メッセージ

■Sande Ngalande（ザンビア）京都大学

私も妻も、貴協会が成功のために素晴らしい仕事をなさったことに大変感謝しています。

イベントは全体的に非常に教育的で開放的でした。私は、日本のことだけでなくアフリカのこと、そしてアフリカと日本の関係の本質について多くのことを学びました。私たちが参加した子どもサミットは、子供たちが何か新しいことを学ぶことが出来るだけでなく、いろいろな他の子ども達と遊べるように非常によく企画されていたと思います。親として、私達は日本とアフリカの親業そして親の生活スタイルの違いを共有することを楽しみました。

私達は貴協会とホストファミリーの岡本ご夫妻に大変感謝しています。とても快適な滞在で、よく食べ、とても分でした。このイベントの良いところは多くて話せばきりがありません。

■Santhio Fall（セネガル）International Business School

こんな大きくて大切なイベントに参加させていただきましてありがとうございました。色々勉強しました。それと人脈も増えてきました。誠にありがとうございました、これからもっと連絡とりたいので色々アドバイスが欲しい！

私は皆さんの決意そしてダイナミックさに本当に驚きました。だから今後、もしお邪魔でなければ、皆さんの素敵なアイデアを共有したいです。重ねて御礼を言います。お疲れ様でした！素晴らしいイベントでした。

■Vick Lukwaga Ssali I（ウガンダ）愛知学院大学講師

いつもハイレベルな企画をしてくださって本当にありがとうございます。イベント中3日間、様々な文化や背景を持つ人々がたくさん参加されましたが、ほとんど滞ることがありませんでした。皆さんの努力と企画力は賞賛に値します。2回とも、私は素晴らしいホストに恵まれ、今では熊本に2つの新しい家族を持つことが出来て大変誇りに思います。今後イベントをより良いものにするために私の提案は、何が出来るか出来ないのかを議論するだけでなく、アフリカはどうあって、何を持っているのかを具体的に示す良い土台だと思い真、ファッション、芸術品等を展示し、本当のアフリカを見せることで、人々は議論の際、必然的に大部分を占める争・貧困以上のことを知ることができます。分科会の一部では、アフリカの留学生達が自分達の国についてプレ単な異文化コミュニケーションの時間中、質問に答えることが出来ると思います。

■Lukman Ayanniyi Sunmonu（ナイジェリア）北海道大学

ユニセフ第20回「アフリカの子どもの日」in Kumamotoにご招待くださって大変ありがとうございました。プログラムはとても良かったですし、議題も非常に考え抜かれたものだったと思います。次回のプログラムでは、もし可能であれば、講演と質疑応答の時間のバランスがもう少しとれているとよいと思います。重ねて御礼を申し上げます。

■Kiprono Philemon（ケニア）政策研究大学院

イベントは大成功でした。関係者の皆さん、ありがとうございました。私自身、予想していた以上の収穫がありました。そして、私の親愛なるホストファミリー森田さんご夫妻にも大変よくして頂いて感謝致します。

イベントは非常に興味深く、教育的でした。水俣病は真に迫るものがあり、適切な対策が今なされなければ、アフリカに起こることが必至です。来年も参加できることを願います。その時は、私の家族も一緒に参加したいと思います。重ねて御礼を申し上げます。皆様に神のご加護がありますように。

■Gabriel Adevemi Francis（ナイジェリア）九州大学

感想、メッセージ

■Esther Wanjiku Njeri(ケニア)APU

イベントはとても素晴らしかったです！本当に楽しかったです。イベントは全てよく計画・準備されていましたが、次のイベントでは、時間を知らせる人が個々のスピーカーに対し何分で終わりかをポスターを振って合図すると良いのではないかと思います。そうすると、スピーカーが時間を考慮して守るでしょう。次回も参加できることを楽しみにしています。イベントに大変感謝します。終わった後もたくさん考えさせられます。どうもありがとう！

■Anastasie Tshilela Kadiombo (DRコンゴ)群馬大学

食事は全て大変おいしかったですし、よく準備されていました。雰囲気はフレンドリーで温かかったです。活動は子ども達にとっても、私にとっても楽しいものでした。ホストファミリーは素晴らしい方々でした。プレゼンについて幾つか提案があります。例えば、それぞれの国の紹介を子ども達が行う等。なぜなら、私達はもうそれほど若くないからです。でも、参加者に子どもはそれほどいなかったですね。

それと、私達のほとんど全員が非常に貧しい国の出身です。事実、少なくとも1度は生活で食料問題を経験しています。ディナーやパーティーで残った食事が処分されたかどうか分かりません。お料理は大変おいしかったですが、もし次回可能であればもっと少なくてよいと思います。或いは、残りを持ち帰りできるようにプラスチック容器があればよいと思います。それでは。本当にありがとう。

■Temesgen Kasahun Assefa(エチオピア)政策研究大学院

熊本でとても素敵な時間を過ごしました！イベントはよく準備されていて、成功だったと思います。このようにすごいイベントを開催してくださって、皆さんに感謝致します。

次回をより興味深いものにするために、パネルディスカッションの時間がもう少し長ければよいと思います。そうすれば、多くの建設的な考えを得ることができると思います。また、会場のコミュニケーションが相互に行われるとより良いと思います。聴衆は聞くだけでなく、ステージで挙げられた問題の多くに対して考えを持っています。全体的に、イベントは私の予想以上のものでした！

【アフリカの子ども日感想】 真和高校／阪本 由依

日本はとても便利になり物があふれていますが、アフリカはまだまだ不便でいろいろな問題も残っています。便利ではないということは、手間が増え、人と人が繋がる時間が多いということになると思います。日本の若い人は便利であることを好みますが、それは人の繋がりが減り、思いやりも欠けてきて、今のひずみができているのではないかと思います。分科会の最後に、アフリカの人が「日本人は英語ができない」ということを熱く語っていました。私も小中高と英語を勉強していながら、どうして話せないのかと思います。

国際交流は国の発展には欠かせないものだと思います。私たちも考えを改め、もっと国際交流に関心を持たなければならないと思いました。

【アフリカの子ども日感想】 第一高校／立川 怜那

私は、持続可能な開発の分科会に参加して、改めて考える点が多かったと思います。まず、自分は生まれも育ちも熊本でありながら、水俣のことをあまり知らなかったので、今回の分科会でたくさんのことを学べました。その中でも、水銀による害やどのようにすれば体に与える影響が少なくなるのかなど、とても勉強になりました。また、水銀、放射能問題について、アフリカの方々と意見交換を行ったときに、様々なことに疑問や意見を持ち、意欲的に発言されているのに驚きました。

私は、今回の分科会でお互いの意見を知ることができ、それについての対策も自分の中で考えることができよかったです。

第20回
アフリカの子どもの日
in Kumamoto

アフリカの課題などについて意見交換した「アフリカの子どもの日」のパネル討論（円内は駐日セネガル大使のブーナ・セム・ディウフ氏）＝熊本市

アフリカの現状 語り合う

県ユニセフ協会

熊本市で「子どもの日」開幕

長）の設立20周年を記念した第20回「アフリカの子どもの日」が7日、熊本市中央区の県民交流館パレアで始まった。

全国の大学に留学するアフリカの留学生ら70人を含む高校生や市民ら約230人が参加した。

東郷良尚・日本ユニセフ協会副会長が「20年に及ぶ熊本からアフリカの子どもや学生への支援に頭が下がる思い」とあいさつ。

講演ではセネガルのブーナ・セム・ディウフ特命全権大使が「アフリカは貧困や飢餓の定した経済成長を続けている」と説明。都市と農村の格差拡大が拡大する現状などアフリカ社会の課題を取り上げた。

4人によるパネル討論ではNPO法人「ルワンダの教育を考える会」（福島市）理事長のカンベンガ・マリールイズさんが、女性の社会参加が進むルワンダの状況を紹介。「国会議員の53％を女性が占め、シングルマザーの子どもにも教育の機会が増えている」、アフリカの言語に詳しい県立大の砂野幸稔教授は「公用語の英語やフランス語での教育が、ストレスや脱落の原因になっている」と言語教育の問題点を指摘。

徳永瑞子・上智大教授、熊本大大学院のンダギジマナ・ジャスティンさん（ルワンダ出身）も意見を述べた。

8日は同会場で水俣病など環境問題、アフリカの音楽など九つの分科会がある。

（山口尚久）

熊本日日新聞 7月8日付記事

アフリカの留学生と交流を

熊本ユニセフ ホストファミリー募集

熊本ユニセフ協会は7月1～3日に熊本市で開く「第19回アフリカの子どもの日イン・クマモト」に、全国の国立大学などから参加するアフリカ人留学生のホストファミリーを募集している。

来月1日からのシンポで来熊

来熊するのは、アフリカ各国から日本の国立大学などで学ぶ約70人。県民交流館パレアであるシンポジウム参加などが目的で、受け入れ家庭による昼間の世話は必要としない。

留学生は日本語と英語が話せる。受け入れは2泊3日。1日夕に対面し、夕食、2日の朝食、3日の朝食とイベント会場までの送迎が必要。

熊本ユニセフでは「アフリカの将来を担う若者たち。数が多いのでぜひ協力を」と呼び掛けている。

熊本日日新聞記事

熊本県ユニセフ協会設立20周年記念

第20回 アフリカの子どもの日 in Kumamoto ～もっと知ろうアフリカ！2012～

とき：2012年7月6日(金)～7月8日(日)

会場：くまもと県民交流館パレア、水俣市立水俣病資料館、熊本大学、熊本城他

参加無料（一部金・交通費は実費となります。（予約が必要です。）

7月6日(金)
- 水俣見学：「世界の環境問題」（会場：水俣市立水俣病資料館）
- サッカー親善試合（16:00～）（会場：慶徳中学校）

7月7日(土)
- 熊本大学訪問（10:00～）谷口 功学長 講話
- オープニング（13:30～）（会場：県民交流館パレアホール）
- 基調講演「ミレニアム開発目標とアフリカの未来」ブーナ・セム・ジュフ特命全権大使（セネガル共和国）
- パネルディスカッション
- 交流会（開始18:00～／会場：ホテルキャッスル）【会費】一般 6,000円 学生 1,000円

7月8日(日)（9:00～15:30）
- 分科会【会場】県民交流館パレア【昼食】アフリカと日本の料理 500円
  - ①セネガルに学ぶ ―― ブーナ・セム・ジュフ特命全権大使（セネガル共和国）
  - ②アフリカから学ぶこと ―― 和崎春日氏（中部大学教授）
  - ③アフリカ・日本：子どもの命の重さ ―― 徳永瑞子氏（アフリカ医療専門家）
  - ④日本におけるアフリカ報道と現実 ―― 大津司郎氏（フリーマーケッター）
  - ⑤教育 学ぶ喜び、知る喜び ―― カンベンガ・マリールイズ氏（カンベンガ教育支援基金理事）
  - ⑥持続可能な開発 ―― 井芹凌一氏（熊本大学国際教育センター教授）
  - ⑦アフリカの音楽 ―― 村本 大氏（熊本グリンパラ代表）
  - ⑧アフリカ料理に挑戦 ―― 戸次元子氏（熊本栄養士）
  - ⑨アフリカ・日本・子どもサミット ―― 唐田勝彦氏（熊本大学教授）

＊講師の都合により変更の可能性もあります。

主催／第20回「アフリカの子どもの日」in Kumamoto実行委員会（公益信託 くまもとNPOファンド助成事業）
お問い合わせ先／熊本県ユニセフ協会内 〒860-0807 熊本市中央区下通1-5-14ノガミの大宝堂下通店5F
TEL.096-326-2154 FAX.096-356-4837

熊本県ユニセフ協会
unicef

熊本日日新聞 6月28日付記事

留学生と交流 アフリカ学ぶ

熊本市

来月6～8日 討論や分科会

日本各地に留学しているアフリカの大学生と熊本の高校生や大学生らが交流する「第20回アフリカの子どもの日 イン・クマモト」が7月6～8日、熊本市中央区手取本町の県民交流館パレアを主会場に開かれる。

県ユニセフ協会内でつくる実行委員会が、先進国と途上国の相互理解を深め年開いて…セネガル…ナ・セム…全権大使…水俣市の…に案内す…

7日は午…らパレア…使が「ミ…目標とア…来」をテ…演。パネル…

8日は午…ら同会場…カから学ジ…育―学ぶ喜…び」「アフ…挑戦」など…会がある。…会☎096…2154。

ホストファミリーからの感想

■ホストファミリーになって　宮川 道子

最初の年は緊張しながら参加した交流会も、今年は心から楽しむことができました。

アフリカといっても様々な国に分かれており、様々な国に分かれているけどやはり一つのアフリカなんだな、と感じました。交流会でレオナルドさんが隣国ガボンの友人を紹介してくれました。そのガボンのマビックさんがにこにこしながら、「私たち（カメルーンとガボン）、すぐ近くの国」と言ったのがとても心に残りました。日本の私たちも、アジアの隣人たちとそんな風にいい合える関係を築ければなあ、と思ったからです。

宮川ファミリーとレオナルドさん、マイケルさん

2年前ホストファミリーとして初めて参加させていただいたきっかけは、私がプランジャパンに登録し、トーゴの男の子と文通するようになったことです。以来毎年アフリカの子どもの日を楽しみにしてきました。今でもアタさんはガーナから連絡をくれるし、バーナードさんが教えてくれたスワヒリ語の歌を私たちは今も歌っているし、去年の夏ナイジェリアのデュペさんのお腹にいた坊やにはうちの次男と同じカズというミドルネームがついている。そして今回マイケルさんとレオナルドさんのリベリアとカメルーンも、身近に感じられる国となりました。熊本ユニセフを通して、たくさんのすてきな出会いをいただきました。ありがとうございました。

野田ファミリーとサリーさん

長澤ファミリーとセネガル大使館
ジュフ参事官とディアワラさん

■ドゥ・リアン（どういたしまして）　渡邉 淳永／南阿蘇村

ホストファミリー2年目である。今年はコンゴ民主共和国から群馬大学医学部大学院に留学中のアニー先生と息子のメヘレン君（中学2年）シャラン君（中学1年）をお迎えした。慌ただしくも楽しい3日間だった。メヘレンは長男らしく物静かで礼儀正しい。一方シャランは人懐こく剽軽な性格で、4歳の息子と始終じゃれあっていた。兄弟で対照的な性格なのは世界共通のことらしい。しかし育ち盛りの旺盛な食欲だけは共通で、夕食に出た唐揚げとだご汁をペロリと平らげ、二人とも「お代わりを下さい」と言った。

2日目の朝、高森町の「湧水トンネル七夕祭り」に案内した。水量の豊富さ透明さに皆歓声を上げた。七夕飾りの短冊にメヘレンは「たくさん友達をつくりたい」シャランは「サッカーが上手になりたい」と書いた。アニーが「病院が見たい」と言うので私の勤務する病院を案内した。内視鏡室で自慢のカプセル内視鏡の説明をすると、アニーは「コンゴでこれ1個買うお金があれば5人の命が救えます」と呟いた。

市内へ向かう途中、とん骨ラーメン「龍の家」で昼食をとった。「いらっしゃいませ！」威勢のいい店員の掛け声に皆驚く。カウンターに座ると厨房内で店長がニコニコしている。運ばれてきた熱々のラーメンを皆ですする。「僕、お店でラーメン食べるの初めて」「このスープうまい」「今まで食べたラーメンで一番おいしい！」店長は大喜びである。中学生二人には「替え玉」も教えてあげた。店を出るとシャランが言う。「僕、大人になったらドクターになって、ラーメン屋さんをつくって、バスケットボールチームのオーナーになる！」真顔である。

アニーが「メルシー・ボクー」と言ってくれた。「どういたしましてって、フランス語でどういうの」と聞くと「ドゥ・リアン（de rien）です」と教えてくれた。改めて「ドゥ・リアン」と答えた。コンゴにラーメン屋さんが出来たら家族で食べに行こうと思う。

渡邉ファミリーとアニーさんファミリー

第20回
アフリカの子どもの日
in Kumamoto

アフリカ映画祭

会場／熊本市現代美術館内　アートロフト

第１弾　「インビクタス 負けざる者たち」（2009年制作）　4月14日(土)13:30～

ラグビーのワールドカップで国の恥とまでいわれた南アフリカチームを初出場、初優勝へと導いたネ
ン・マンデラ大統領の不屈の精神を描く、真実の物語

第2弾　「ホテル　ルワンダ」（2004年制作）　5月19日(土)13:30～

1994年～ルワンダ「愛する家族を守りたい」ただ1つの強い思いが、1200人の命を救った真実の物語。

第3弾　「ベンダ・ビリリ！」（2010年制作）　6月9日(土)13:30～

カンヌ映画祭オープニング作品
まだ世界は捨てたもんじゃない！コンゴのどん底から世界No.1バンドへ！路上の音楽集団とストリ
の子どもたちの5年に渡る勇気と希望の物語。

実行委員会

第２０回「アフリカの子どもの日」の開催にあたり、高校生、大学生の皆さんと5回にわたって実行委員会を開き企画を練り

● **第１回実行委員会**
日時：４月１４日(土)１３：３０～１７：００
内容：今年の企画に関する希望、要望
参加者：５０人

● **第２回実行委員会**
日時：５月１９日(土)１３：３０～１７：００
内容：①今年の分科会について ②希望の分科会を選ぶ
参加者：７０人

● **第３回実行委員会**
日時：５月２６日(土)１４：００～１７：００
内容：分科会ごとに分かれ、進め方や役割決め
参加者：４０人

● **第４回実行委員会**

● **第５回実行委員会**
日時：６月２３日(土)１４：００～１７：０
内容：当日の役割や全体の流れを確認
参加者：６０人

会場は、いずれの回も現代美術館アートロフトで行い

アフリカ出身の参加者とホストファミリー名簿

所　属	名　前	国	ホストファミリー
北海道大学	Lukman Ayanniyi Sunmonu	ナイジェリア	大久保誠様・孝子様
宇都宮大学	Uyanzindile Mabike Mamenzigou	ガボン	河本俊一様・文子様 竹屋元裕様
群馬大学	Kadiombo Anastasie Tshilela	DR コンゴ	渡邊淳永様・由紀様
前橋市立第三中学校	Tambwe Merlin	DR コンゴ	〃
前橋市立第三中学校	Tambwe Tshilela Charles	DR コンゴ	〃
政策研究大学院	Temesgen Kasahun Assefa	エチオピア	松本淳一様・聡子様
政策研究大学院	Kidanemariam Berhe Hailu	エチオピア	山内町子様
政策研究大学院	Zarau Wendeline Kibwe	タンザニア	森田健治様・節子様
政策研究大学院	Terrence Kairiza	ジンバブエ	小野寺武治様・久美子様
政策研究大学院	Kiprono Philemon	ケニア	森田健治様・節子様
東京大学	Anthony Odoemena	ナイジェリア	山内町子様
東京大学	Bruno Fokas Sunguya	タンザニア	岡本定昭様・真理様
東京大学	Linda Beatrice Mlunde	タンザニア	〃
	Belinda Bruno Sunguya	タンザニア	〃
日本電子専門学校	Ibou Fall	セネガル	緒方富規子様
湘南工科大学	Leopoldine Michele Ntap	セネガル	芹川博幸様・真寿美様
国際ビジネススクール	Santhio Fall	セネガル	宮川　隆二様・尚美様
愛知学院大	Vick Lukwaga Ssali	ウガンダ	野田正一郎様・涼子様
名古屋大学	Maouloud Talla Fall	セネガル	野中潤一郎様・久美子様
京都大	Sande Ngalande	ザンビア	岡本定昭様・真理様
	Fanny M. Ngalande	ザンビア	〃
	Cinthemwa Ngalande	ザンビア	〃
	Natasha Ngalande	ザンビア	〃
大阪大学	Geoffrey Mutyaba	ウガンダ	山口忠彰様・佳代様
修成建設専門学校	Innocent Nabende	ウガンダ	小崎幹生様・恵子様
関西学院大	Julius Ssegujja	ウガンダ	〃
インストラクター	Andrew O Mose	ケニア	池上喜則様・圭子様
九工大	Michael Zontche Bernard	リベリア	宮川経範様・道子様
九州大学	Jacqueline Kubochi Makatiani	ケニア	山田兼信様・充希子様
九州大学	Omorogbe Joseph Asemota	ナイジェリア	宇野謙二様・多賀子様

所　属	名　前	国	ホストファミリー
九州大学	Abu Bakarr Jalloh	シエラレオネ	〃
九州大学	Adeyemi Francis Gabriel	ナイジェリア	松田幸正様・加洋子様
九州大学	Kwati Leonard	カメルーン	宮川経範様・道子様
九州大学	Anani Yaovi Bruce	トーゴ	水上公誠様・里美様
九州大学	Barassou Diawara	セネガル	長澤秀昭様・久美子様
九州大学	James Nyirenda	ザンビア	佐治映子様
	Harriet Malabo Nyirenda	ザンビア	〃
	Khumbo Nyirenda	ザンビア	〃
	Chimwemwe Nyirenda	ザンビア	〃
	Mapesho Nyirenda	ザンビア	〃
APU	Esther Wanjiku Njeri	ケニア	高野剛一様・亜紀様
APU	Kundai Magodora	ジンバブエ	坪井ヒロ子様
長崎大学	Yombo Dan Justin Kalenda	DR コンゴ	水上公誠様・里美様
長崎大学	Thommas Mutemi Musyoka	ケニア	松本謙二郎様・浩子様
長崎大学	Daniel Boamah	ガーナ	古閑博明様・幸世様
長崎大学	Christine Namalwa Masinde	ケニア	溝上喜久隆様・顕子様
長崎大学	Nicholas Nganga Mwaniki	ケニア	松本謙二郎様・浩子様
熊本大学	Prosper Godfrey Mafole	タンザニア	
熊本大学	Meribe Stanley Chukwudi	ナイジェリア	
熊本大学	Macdonald Reuben Mahiti	タンザニア	
熊本大学	Justin Dnagijimana	ルワンダ	
熊本大学	Ahmed Abdel-Moamen	エジプト	
熊本大学	Edwin Pitakomoki Koveke	ソロモン諸島	
熊本県立大	Hilary Mwimanzi	タンザニア	
ALT	Mopailo Thomas Thatelo	南アフリカ	
ALT	Michael Frederick Hofmeyr(夫)	南アフリカ	
英会話講師	Ana Sofia dos Santos Guerreiro (妻)	ポルトガル	
ルーテル学院2年	Sakura	ルワンダ	
会社経営	Camara Mohamedo	ギニア共和国	

※APU：立命館アジア太平洋大学

第20回
アフリカの子どもの日
in Kumamoto

20回を迎えた「アフリカの子どもの日」in Kumamoto

今年も地域のたくさんの方々のご協力により第20回「アフリカの子どもの日」は多くの成果を残し終ることができまし
ファミリーの皆様をはじめとしてご支援いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

思い返してみますと1992年熊本県ユニセフ協会(㈶日本ユニセフ協会熊本友の会として設立)が設立される前年アフリ
構では「アフリカの子どもの日」が制定されました。ユニセフが一番支援しなければならない地域はアフリカであると熊本
「アフリカの子どもの日」にちなんだ活動に取り組み第一回目はザンビアの駐日大使を迎えて60余名の参加でスタートし
時、熊本ではアフリカの人々に会うことも少なく、資料もなく手探り状態の中で活動を始めました。第4回目を開催した199
副会長から和気邦夫ユニセフ東京事務所長をご紹介いただき初めてアフリカ大使館関係の方々12名をお迎えして「アフリ
もの日」を開催することができました。その折東京事務所の広報担当官をされていた澤良世さんのご協力をいただきその
至っております。今年もアフリカからの留学生70名を迎え熊本の若者を含め延べ1300名の参加で3日間のイベントを開催
ができました。この20年を振り返ると最初支援しなければならないアフリカとの思いで活動を開催しましたが回を重ねる
リカには先進国を含む世界の問題が凝縮されており、戦後経済優先で進んできた日本が失ってきた地域や家族の絆等学
多々あることに気づかされました。

またこの数年、開発問題を考えるために大使や留学生との水俣見学ツアーを開催していますが水俣病を引き起こした
かした開発の有り方等をアフリカをはじめとした開発途上国に示唆する責務が私たちにあると考えています。

この20年熊本の若者たちやアフリカの留学生をはじめとして地域の多くの人々と皆で試行錯誤しながら活動を続けて
が、今年は分科会でも熊本の高校生の積極的な発言が目立ちようやく「アフリカの子どもの日」がアフリカの留学生と熊
達が共に考え発言できる場になってきたという印象を受けることができました。

20年という月日をかけてやっと土台ができ実質的なスタートラインに立つことができた年であったとの思いを強くして
この活動の質を高め継続させ、より実のあるものにしていくためにはこれからを担う若い人の継続的、積極的かかわりが
す。関心ある皆さまのご参加をお待ちしております。昨年起きた東日本大震災後の原発事故は物質的豊かさを追い求めて
にとって、人間が人間として人間らしく生きていける持続可能な開発をどのように成し遂げるか、このことはアフリカにとど
球上全ての課題であり、このことに関しても「アフリカの子どもの日」in Kumamotoの活動を通して今後継続的に取り組
たいと考えております。世界は激しく動いております。その中で日本人はどのように生きていくのでしょうか?これからの日
は今を生きる私たち一人一人の手中に委ねられているように思います。

2012年10月吉日
事務局一同(文

開催にあたってご支援、ご協力をいただいた方々(順

熊本県
熊本市
熊本大学
熊本県伝統工芸館
熊本城総合事務所
水俣市立水俣病資料館
公益信託くまもと21ファンド
熊本放送文化振興財団
熊日文化スポーツ基金
㈱RKK熊本放送
㈱熊本日日新聞社

喜多流　狩野琇鵬氏
NTT西日本 熊本支店
清香会
㈱古荘本店
㈱モトーレンフロイデ
そのだ脳神経外科医院
高野病院
魚住クリニック
熊本機能病院
裏千家松田社中
東阿部流

市民大学(マチナカカレッジ)
㈱大塚製薬
イタリー亭本店みやもと 上通町
リストランテミヤモト 辛島町
㈱ニッポンフーズ 上通町
㈱高瀬屋 南高江町
元田農園 菊池市七城町
馬場農園 天草市五和町
ゆうき共同農園 下益城郡美里町
料理の好きなグループ
㈲林工業所 大蔵

自然庵
黒髪地域コミュニティセンター
㈱セルモ　シグナル交通
NPOくまもと未来
マリスト高校茶道部
熊本中央高校
浅山弘康氏
西田進一氏
小栗宏夫氏
蟻田滋子氏
[illegible]

最相博子氏
松田加洋子
野田恭子氏
武宮公子氏
田島涼子氏
新開節子氏
伊藤まゆみ
伊藤一敏氏
伊藤まり子
河村明美氏
[illegible]

「アフリカの子どもの日」in Kumamoto

20年の歩み

期日	第1回　1993年6月16日	会場	熊本市女性センター	【参加者数 65人】
内容	ザンビア大使ジョー・ムアレ氏　講演「ザンビアの子どもたち」　●アフリカ料理を楽しむ			

期日	第2回　1994年6月11、12日	会場	熊本県総合福祉センター、熊本城、刑部邸	【参加者数 64人】
内容	日本ユニセフ協会　小林勤氏ファミリー（夫人がケニア出身）を迎えて（国際家族年）			

期日	第3回　1995年6月16日	会場	熊本県総合福祉センター	【参加者数 62人】
内容	●日本ユニセフ協会　間中恵子氏　講演「エチオピアの人とくらし」　●熊本在住のアフリカの留学生との交流			

期日	第4回　1996年6月15、16日	会場	熊本県総合福祉センター、泰勝寺	【参加者数 170人】
内容	ユニセフ駐日事務所長・和気邦夫氏のご協力でガーナのダツモア氏を団長としてジンバブエ、ザンビア、ガーナ、ケニアの駐日大使館家族12人が参加			

期日	第5回　1997年6月14、15日	会場	阿蘇方面探訪、熊本県伝統工芸館	【参加者数 140人】
内容	ガーナ、マラウィ、ザイール、ジンバブエの駐日大使館家族15人が参加			

期日	第6回　1998年6月13、14日	会場	熊本市青年会館、熊本市子ども文化会館	【参加者数 280人】
内容	●マラウィ、ガーナ、ギニア、ルワンダ、ケニア、南アフリカの駐日大使館家族23人が参加 ●ガーナ、ルワンダ大使夫人による手作り料理紹介　●この時からジェンベ太鼓参加			

第20回
アフリカの子どもの日
in Kumamoto

期日	第7回　1999年6月11、12、13日	会場	熊本市青年会館	【参加者数
内容	ガーナ、コートジボアール、ナイジェリア、ルワンダ、タンザニアの駐日大使館家族21人が参加 ●大津司郎氏　講演　●パネルディスカッション			

期日	第8回　2000年6月10、11日	会場	藤園中学校体育館、熊本市子ども文化会館	【参加者数
内容	＜私たちのめざす21世紀＞ ●ユニセフ駐日事務所長　サムエル・クー氏　講演「近くて遠い、遠くて近い」　●ワークショップ「どうする21世			

期日	第9回　2001年6月16、17日	会場	熊本市国際交流館、熊本城数寄屋丸、熊本市子ども文化会館	【参加者数
内容	●ガーナ、ナイジェリア、タンザニア、ジンバブエの在日家族19人が参加 ●グループディスカッション　国の紹介、自己紹介など　●アフリカと日本の文化の紹介（能、お茶、生け花、民話、踊り			

期日	第10回　2002年6月15、16、17日	会場	くまもと県民交流館パレア	【参加者数
内容	●Mr. Joseph Gaze氏（ガーナ）　講演「アフリカのイメージ；過去と現在」 ●ワークショップ「地球の未来は私たちの手に」　コーディネーター：大津司郎氏 ●コートジボアール、エチオピア、ガーナ、ナイジェリア、タンザニア、ジンバブエの在日家族20人が参加 ●お茶会、アフリカの音楽、ジンバブエ楽器演奏，エチオピアダンス、あそび、アフリカの料理・日本のお菓子 ●分科会：難民・少年兵・エイズ、アフリカの言語、あそび　●学校訪問（2小学校、5中学校）			

期日	第11回　2003年6月14日	会場	熊本市民会館、熊本城数寄屋丸	【参加者数
内容	●和崎春日氏（名古屋大学教授）　講演「アフリカの人々とつながり、世界の人々とつながる」 ●分科会：歴史・文化・民族（和崎氏）、紛争・少年兵（大津司郎氏）、エイズ（粂和彦氏）、難民（石谷敬太氏） ●熊本在住のアフリカからの留学生やJICA研修生など28人が参加			

期日	第12回　2004年7月10、11日	会場	熊本市民会館、熊本城数寄屋丸	【参加者数
内容	●前夜祭　●基調講演とシンポジウム ●分科会：和崎春日氏、澤良世氏、高橋一馬氏、粂和彦氏、砂野幸稔氏、アイザック氏、シルンガ氏			

期日	第13回　2005年7月9、10、11日	会場	くまもと県民交流館パレア	【参加者数
内容	●ユニセフ駐日事務所長　浦元義照氏　講演「新しいアフリカ」～子どもたちの夢～ ●パネルディスカッション「私にとってのアフリカ」 パネリスト：マラウィ大使ジェイムス・チカゴ氏、エルファリシ・ヤッセル氏、大津司郎氏、本田はつなさん ●ワークショップ「私の大切なもの」 ●分科会：アフリカ東（大津氏）、アフリカ北（慶田勝彦氏）アフリカ南（粂和彦氏）、アフリカ西（澤良世氏）ア のビーズクラフト（上羽陽子氏、朝岡和子氏）アフリカの音楽（村本大氏）、アフリカの遊び・日本の遊び			

期日	第14回　2006年6月16、17、19日	会場	熊本城数寄屋丸、熊本市国際交流会館	【参加者数 580人】
内容	●セネガル大使とともに水俣訪問 ●ガブリエル・アレクサンドル・サール氏（駐日セネガル大使）講演「セネガルの子どもの養育について」 ●パネルディスカッション「子どもの命を守る」 パネリスト：セネガル大使、佐藤克之氏、ラファエル・エボク氏、ジョセフィン・エイボク氏 ●ガーナの空　中継（佐藤毅彦氏） ●ユニセフ東京事務所長　浦元義照氏　講演「世界の抱えている問題」～若者にできること～ ●分科会：環境と開発（高峰武氏）、紛争（大津司郎氏）文化と生活（慶田勝彦氏）、 保健・衛生・エイズ（片渕美和子氏、佐藤克之氏）、エジプトの文化と生活（ラビーア・モハメッド氏）アフリカの音楽（村本大氏） ●熊本や東京在住の留学生や、JICA研修生など27人が参加			

期日	第15回　2007年7月7、8日	会場	くまもと県民交流館パレア	【参加者数 610人】
内容	●ゴッドフリー・シマシク氏（駐日ザンビア大使）講演「私の伝えたいアフリカ：その文化と歴史」　●ザンビア大使とともに水俣訪問 ●ユニセフ東京事務所長　ダン・ローマン氏　「アフリカの平和と発展は子どもたちから」 ●パネルディスカッション「アフリカ 未来に向かって～子ども・教育・環境～」 パネリスト：ザンビア大使、ダンローマン氏、カンベンガ・マリールイズ氏、岸田袈裟氏、本田はつなさん ●分科会：教育（マリールイズ氏）、環境（原田正純氏）文化・歴史（澤良世氏）、エイズ（岸田袈裟氏） メディア（大津司郎氏）、クラフト（上羽陽子氏）、料理（アニファ・カライ氏）、音楽（村本大氏） ●立命館アジア太平洋大学や熊本大学などに在籍の42人のアフリカからの留学生が参加			

期日	第16回　2008年7月1～7日 ＜アフリカンウィーク＞	会場	県立美術館（写真展）、くまもと県民交流館パレア 藤園中学校（サッカー）	【参加者数 1000人】
内容	●田沼武能写真展「アフリカ―子どもたちの日々―」　●サッカー親善試合　●ルワンダ大使とともに水俣訪問 ●エミール・ルワマシラボ氏（駐日ルワンダ大使）　講演「内戦から平和へ」 ●パネルディスカッション パネリスト：ルワンダ大使、和崎春日氏、カンベンガ・マリールイズ氏、コーヴァー・タヌー・コティー氏 ●分科会：環境（原田正純氏）、紛争・メディア（大津司郎氏）、アフリカンクラフト（上羽陽子氏、西頭真美子氏） 女性のエンパワーメント（慶田勝彦氏）、文化・歴史（和崎氏、村本大氏）、教育・ルワンダ（マリールイズ氏） ●立命館アジア太平洋大学や熊本大学などに在籍の50人のアフリカからの留学生が参加			

期日	第17回　2009年7月3、4、5日	会場	くまもと県民交流館パレア、藤園中学校（サッカー）	【参加者数 1160人】
内容	●ジブチ大使とともに水俣訪問　・サッカー親善試合 ●アホメド・アライタ・アリ特命全権大使（ジブチ共和国）　講演「ジブチとアフリカの角地域の現状」 ●パネルディスカッション「アフリカと私」 パネリスト：ジブチ大使、東郷良尚氏、和崎春日氏、イガ・アラン氏、カンベンガ・マリールイズ氏、澤良世氏 ●功刀純子ユニセフ東京事務所代表　講演「ミレニアム開発目標を通してみるアフリカの未来」 ●分科会：持続可能な開発（井芹道一氏）、アフリカの家族と健康（エボク・ラファエル氏、アニファ・カライ氏） アフリカの歴史と文化に学ぶ（和崎春日氏）、ジェノサイドから15年（マリールイズ氏） アフリカの実像を知る（大津司郎氏）、おしゃれなアフリカ（ジュリアナ・シェカラケ氏） アフリカ音楽を楽しもう（村本大氏）、アフリカ料理に挑戦（カマラ・モハメッド氏） ●北海道から鹿児島まで56人の留学生が参加			

第20回
アフリカの子どもの日 in Kumamoto

期日	第18回　2010年7月2、3、4日	会場	白川中学校（歓迎、交流会）、熊本学園大学　【参加者数 1
内容	●ウガンダ大使とともに水俣訪問　●サッカー親善試合（学園大グラウンド） ●ワスワ・ビリグア特命全権大使（ウガンダ共和国）　講演「日本の、そしてアフリカの若者への課題」 ●和崎春日氏　講演「アフリカの年」から半世紀 ●パネルディスカッション パネリスト：ウガンダ大使、早水研氏、和崎氏、徳永瑞子氏、ンダギジマナ・ジャスティン氏、澤良世氏 ●特別講演　原田正純氏　「持続可能な開発：水俣に教えられること」 ●分科会：ウガンダの歴史と課題（ウガンダ大使）、アフリカから学ぶこと（和崎氏） アフリカ・日本 子どものいのちの重さ（徳永瑞子氏）、日本におけるアフリカ報道と現実（大津司郎氏） アフリカへの支援－私たちにできること（早水研氏）、アフリカの音楽を楽しもう（村本大氏） アフリカと日本における教育の現状と展望（菊川穣氏）、アフリカ料理に挑戦（戸次元子氏） ●アフリカ諸国からの留学生70人が参加		

期日	第19回　2011年7月1、2、3日	会場	くまもと県民交流館パレア、大江小学校（サッカー）　【参加者数 12
内容	●モザンビーク大使とともに水俣訪問　・サッカー親善試合　●熊本大学訪問（谷口学長講話） ●ベルミロ・ジョゼ・マラテ特命全権大使（モザンビーク共和国）　講演「モザンビーク：長い紛争から平和、そして開 ●パネルディスカッション パネリスト：モザンビーク大使夫妻、和崎春日氏、井芹道一氏、澤良世氏 ●分科会：紛争から平和へ－モザンビークの経験（モザンビーク大使） 平和のための女性の役割－モザンビークの視点から（アッサ・アベル・ジョナゼ・グアン大使夫人） 環境－持続可能な開発（井芹氏）、アフリカの実像を知る（大津司郎氏）、アフリカから学ぶ－生活文化（和 アフリカの民話と遊び（慶田勝彦氏、カマラ・モハメッド氏） ルワンダ紛争から3.11へ（カンベンガ・マリールイズ氏）、アフリカ音楽を楽しもう（村本大氏） アフリカ料理に挑戦（戸次元子氏） ●アフリカ諸国からの留学生70人が参加		

期日	第20回　2012年7月6、7、8日	会場	くまもと県民交流館パレア、藤園中学校（サッカー）　【参加者数 13
内容	●ブーナ・セム・ディウフ　駐日セネガル共和国特命全権大使を迎えて　●アフリカ諸国からの留学生68人		

講師の方々やいつもご協力いただいている方々

閉会のことば

ロビーで語らい

セネガル大使とセネガルからの留学生

パネルディスカッション

オープニング

藤園中体育館にて

マリスト高校茶道部・裏千家松田社中

公益信託 くまもと21ファンド助成事業
発行者：第20回「アフリカの子どもの日」in kumamoto 実行委員会
発行日：2012年10月
印　刷：株式会社トライ
熊本市北区植木町味取373番地1
http://www.try-p.net

熊本県ユニセフ協会

〒860-0807 熊本市中央区下通1-5-14 メガネの大宝堂下通店5F TEL.096-326-2154 FAX.096-356-4837
ホームページ http://www1.odn.ne.jp/unicef-kumamoto/ 公益信託 くまもと21ファンド助成事業

For every child
Health, Education, Equality, Protection
ADVANCE HUMANITY

unicef

第20回「アフリカの子どもの日」in Kumamoto 2012　決算

○　2012年4月14日・5月19日・6月9日　　アフリカ映画祭　　現代美術館アートロフト

○　2012年7月6・7・8日　　「アフリカの子どもの日」in Kumamoto

「アフリカの子どもの日」実行委員会　会長　谷口　功

収入		予　　算	決　　算
日本ユニセフ協会	地域普及助成金1,700,000　　2011年度カード取扱助成金237,890	1,900,000	1,937,890
会費	交流会（一般 6,000円×67人　ホストファミリー3,000円×33人　　学生1,000円×139人）	1,000,000	640,000
	昼食　500円×174人	100,000	87,000
寄付金	花の薪能チケット代の一部(狩野琇鵬氏)162,500　協賛金500,000	760,000	662,500
その他の助成金	熊日スポーツ基金　熊本放送文化振興財団	300,000	250,000
21ファンド		1,800,000	1,420,000
熊本県ユニセフ協会	バザー益金他	240,000	237,525
合計		6,100,000	5,234,915

支出

		予　算	決　算
会場費	県民交流館パレアホール・会議室(2日間)と会場付属設備代	270,000	209,190
	現代美術館アートロフト3日間と会場付属設備代(アフリカ映画祭)	80,000	46,300
交通費	県外から参加のアフリカからの留学生 （本州から29名　九州から20名）	1,000,000	1,032,310
	大使・県外からの講師旅費 （大使他6名）	500,000	430,582
	アフリカの留学生・講師送迎バス代(3日間) （中央高校バス）	50,000	20,000
	大使・講師移動タクシー代	10,000	8,480
保険料	アフリカの留学生・参加者3日間 （サッカー親善試合も含む）	30,000	23,970
会議費	7/6 水俣訪問・サッカー費用(20,000円)　昼食サンドイッチ・飲み物約80人分　大使・講師打ち合わせ夕食代	150,000	128,584
	7/7 大使・講師・留学生昼食サンドイッチと飲み物代約90人分　大使・講師打ち合わせ夕食代	180,000	134,238
	7/7 交流会(キャッスル)	1,800,000	1,361,478
	7/8 昼食交流会 (手作りの日本の料理とアフリカの料理約300人分)	200,000	140,772
講師料	講師料 11名(大使も含む)	300,000	240,000
委託料	3日間のタイムスケジュール・シナリオ作成　会場付属設備機器調整・演出等	100,000	30,000
消耗品費	分科会費用・文房具・交流会で出すお茶席のお菓子抹茶代・お土産代等	100,000	94,705
運搬料	国旗・大太鼓運搬料	50,000	32,000
通信費	案内状送料(映画祭も含む)会員300名・小・中・高校・大学・ボランティア・ホストファミリー等　参加者への礼状	90,000	73,780
印刷代	チラシ10,000枚　当日プログラム600部(英語版も)　写真代	200,000	162,890
実行委員会会議費	5回開催(会場費・印刷代・お茶代・反省会等)	100,000	60,781
報告書作成費	日本語版・英語版報告書600部(592,200)　翻訳料(90,000) 20周年記念ビデオ制作費(280,000円)	800,000	962,200
予備費	雑費(振込手数料・浴衣クリーニング代他)	90,000	24,793
合計		6,100,000	5,217,053

収入　5, 234, 915　－　支出　5, 217, 053　＝　残高　17, 862（繰越金）